

雑詠日記

海蝶息音

卷の七

二〇二二年

谷川
修



一昨年ずいぶんの試練に遇ったがなんとかそこから脱出できて、去年は、体調を整えることに気をつけながら過ごすうちに、一年余りが過ぎて新しい年を迎えた。新年にあたり、二〇二一年の雑詠日記をまとめてみると、一昨年以前に近い生活にもどっていることが分かる。ただし、試練からどれだけのことを学んで日の過ぎし方が改まったかと考えてみると、心もとない。たしかに、背戸に出て海を見て対岸を眺め日の昇る天を仰いで、こうして生きていることを感謝する気持ちは強くなった。しかし、長いあいだに身についた言動の仕方は、改善しようとする気持ちはあっても、なかなか改善できない。わたしが身心の不調に陥ったのは一言で言えば「安心立命」の問題だったが、その境地へ向かって前進したようには思えない。老木が傷を包むように組織でおおって固めるように、ただ、物事の受けとめがわずかに鈍くなっただけなのかもしれない。

それでも、「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」という古人の言葉に励まされて、口から漏れ出る言葉を書きとめることは続いている。百歌するうちに一つでも光を発するものができることを願いながらやっていたら、心の安らぎに近づき、天命がくるとき恐慌を来さず受け入れる状態へと向かうだろうか。それが老衰だとしても。

一月一日

寒風が削る残月拝む朝

(初日は雲の中、月が西の空に残る)

一月五日

正月を蟄居し暮らす蘇東坡はなお詩をつくり志操を保つ

往時の宋に似て人心の衰弱した現代日本でも同じ心がけが必要だと思ふ。

一月六日

花のない梅にヒヨドリ寒の図絵

(凜々内海を見ながら浦人と昔話)

名を負わずクリスマス・ローズ静やかに

一月七日

うつすらと雪をかぶった家々を風にもまれて見下ろすカモメ

一月八日

「老いたシテのいる場景」

白い毛糸の帽子をかぶり、さくさく音を立てて人影の見えない雪道を歩めば、雲の覆う天から数本の日の条光。風に流されて雪が乱舞し頬を打ち、さらに風は穏やかな海に大きな弧を描く。その上を高く今日の鷗は滑空している。はるか下、白い浦の海辺の道を独りの老夫が行く。

白はげが櫓持つて来いと呼んでいる

子供のころ赤はげと呼んでいた斜面が、またそりを作れと今日は雪で白い。

一月九日

老シテが心躍らせ嬉々として雪だるま置く背戸の岸壁

昨日、ローカル・ニュースがこの地域で三十年ぶりの低温だと伝えた。

灯油給湯機の水道管が凍って湯が出ず風呂に入れなかった。今朝も寒さをおして積雪の増した海岸道路を散策。思い立ち小さな雪だるま(目は南天)をこしらえて岸壁に置き、内海を背景にして何枚も写真を撮った。

一月十日

雪だるま子を生み共に海を見る

誰かがわたしの作った小さな雪だるまのそばにさらに小さな雪だるまを並べた。冷たい水道水は昨日よりも気温が低いと告げる。薄雲を透かしておぼろな太陽が、月光が照らすような静かな輝きをささ波に与えている。対岸には家々が雪の白さをまだ残し、山々と内海と人の暮らしが作り出すこの美しい景色に見とれる。毎日こんなことを記しているのは、これほどの寒さと雪に遇って心楽しむことはもうないだろうと思うから。

一月十七日

寒中を行脚、愚禿の手に椿

一月十八日

ミカン食むメジロの顔を見分けえず

昔話ではありませぬ。人の訪れるのもまれな老夫婦の家で、中庭に半分
に切った蜜柑を置いて毎日小鳥に饗しておりました。三日前のこと、それ
を食べていた目白が、ヒヨに追い払われたひょうしに窓の玻璃にぶつかり
卒倒いたしましたなあ。目も開かないのでおろおろ介抱したら、幸い息を
吹きかえして飛び立ちましたよ。今日来たのはその目白でしょうか。

一月二十日

数葉の写真に眼射抜かれる人新生は早や生き地獄

『世界二月号』の巻頭グラビアに身がすくんだ。一枚目の百近くの緑の円形の広がる
写真は、最初、おもしろい幾何学模様のように見えた。だが、それがサウジアラビアの
砂漠につくられた灌漑農地で、一つの円の直径が1km、水は地下深くからくみ上げられ
巨大スプリンクラーで散水する、と説明されてみれば見方は一変する。三枚目は、万で
数えるほどの牛が米国の広大な草もない荒地に囲われている写真。食肉工場に「出荷」
される前に濃厚飼料で四か月太らされるのだという。七枚目の写真も米国で、とても大
きなドーナツ状に身動きのとれないほど小さな囲いが並び、それぞれに搾乳機をつけら

れた乳牛が入っている。人工授精で生を受けた乳牛が全部で八万五千頭いるそうだ。生き物を手段とする工場である。二十二時間稼働して牛乳を搾取し、市場に出荷するといふ。先日のニュースで、鳥インフルエンザの流行をおさえるために五百万羽の鶏を「殺処分」と聞いて、大変な世の中になったと思つたが、それは一例に過ぎなかつた。もう、ほかの写真のことを言うのはやめよう。こんな殺伐としたことを歌に詠み雑詠日記に加えるのは愚かな者のすること。それにしても、殺伐なことを行ないその悲惨に悲鳴をあげるのも人間、と知らなければならぬとは。これらのことは、「人新生」と呼ばれるようになった今の世の出来事で、未来の末世の話ではない。

一月二十五日 園丁に復帰し疲れ苦にもせず鋏を使う心楽しさ

一月二十九日 小園の農事再開腕腰の痛みをさするまだ病み上がり

薄氷張つて太鼓に、石の白

耳を澄ませば…

一月三十一日 三五七ムベ花咲かせ幸招け

何年も花をつけなかつたムベに七葉

二月三日 旧曆のまだ十二月立春に雛壇飾り妻は奇とせず

太陽曆を採用したとき、明治の人たちはなぜ季節の行事を季節はずれの日にしないでも済むように一工夫しなかったのだろうか。曆に六曜を書きこむことには今でもあれほど熱心なのに。

二月四日 キリギリス起こす老夫はなお未熟

二月六日 中天に月や未明の空冴える
はなだ 縹の色に染まる全天

二月十日 塩旱病虫害を克服し紅の花咲かす老梅

二月十四日 満開の梅で自名を名乗るヒヨ

二月十八日 我が海は降りしきる雪受容する

聴くがよいしんしんと降る雪の声

白頭に雪を重ねて道歩む

侘助が雪の頭巾で粹氣どる

二月二十五日

山桃を植えて余命を計る愚者

(実を口にすることができるか)

木を植える喜寿に寄り添うジョウビタキ

(小鳥の方が楽しんでいる)

二月二十八日

春風が焦げたすすきの葉を寄こし秋吉台の野焼き知らせる

泥に手を、蓮の台にあこがれて

三月三日

モンテーニュと連れ立ち入り江見て歩む月の港で買った絵葉書 (孫へ)

三月九日

春招く峠の辻の幣白し

三月十一日

月無き夜月の港へこの舟で

舵手よ漕ぎ出せ星も見えぬが

三月十六日

紋白蝶そつとわたしの肩を押す

(一歩踏み出すことにした)

雨上がり対岸の山映す海紋白蝶は渡り終えたか

三月二十六日

地を這って草抜く作務も人として諸事万端に含む園丁

三月二十八日

蓮の根を潜める白に花筏

(海棠の花びら)

三月二十九日

日をかすめ我が海埋める黄砂降る

四月三日

荒れ畑で汗してやはり愚に生きる

四月八日

「巡りあい」

ひとしづく余命授かり
梅桜、李と桃と杏には
梨と林檎が咲き継いで
その花々とわたくしが
生きる奇跡に恵まれる

四月十六日

年寄りが書物を上梓くたびれてアイリス活けた書房で仮寝

四月十八日

吉報をもって燕が到来す

四月二十日

足るを知り春を楽しむ海光る

汗顔しうれしい便り読む老夫

四月二十一日

カヌー漕ぐ人がこの湾独り占め

(退役自衛官)

四月二十六日

朝陽浴びラジオ体操、生きていることを実感、歩み始める

四月二十八日

巣作りに雀の夫婦余念なし

四月三十日

朝の潮満ちてこの身も春の中

輝く海進むカッター真つ白く權十二本青春の声

(水産高校生)

五月三日 落首 コロナ禍の財政支出病む国の疲弊をさらに深刻にする

病む国が観客もないお祭りになおのめりこみ国傾ける

この国の権力にぎる者たちの責任負わぬ成り行き任せ

五月八日 かけがえのない

この小さなコスモス

朝日が昇り夕日が沈む山々

それのとりまくおだやかな内海

太陽が保全してわたしを生かしている

この親愛なる自然をどうか壊さないで

近頃の新聞の書評がとり上げる書物が物足りなくて探したら、わたしの注意が足りなくて見逃していた書物『グローバル経済の誕生 貿易が作り変えたこの世界』を見つけた。本来、歴史家はこういう書物をめざすべきだと思った。エピソードを読んで、家の背戸に出て景色を眺めたら、急に右のような感慨が湧いた。相変わらず、リフレインにすぎないけれど。

五月十三日

雨上がり蜘蛛の網目を飾る水

虞美人が果樹それぞれに寄り添うよ

(果樹園に数多の虞美人たち)

五月十四日

一つ神がガザの砲煙鎮めえず

五月十五日

虞美人と富有を省き茱萸を採る

(午後から雨、梅雨入り)

五月二十八日

つばめ二羽きらめく海を舐めて飛ぶ

太陽の恵みのグミをおすそわけ

五月三十日

対岸に何か伝える狼煙のろし立つ天運めぐり五月末日

空池に姿を見せよ赤手蟹

六月七日

日の下で蛍袋に憩う蝶

(F・ジャコブ『生命の論理』を読んでいる)

六月十日 鯉のぼり欠いて蕨が光る浦

六月十三日 甲イカの甲浮かぶ海暑氣予感

六月十四日 無残やな三つに一つの林檎折る

とらわれず華奢な花持つ布袋たれ石臼の水清めて暮らせ

六月十七日 『生命の論理』を学び藻屑寄す岸辺を見つめしばし黙考

六月二十五日 月仰ぐ族よ望みよく保て

七月一日 七万の一糸乱れぬ式典が曲折孕む歴史予示する
(中夏帝国)

七月二日 白鳥が七羽列なし海渡るしばし明るむ梅雨の夕暮れ

七月三日 腰下す庭師に蜘蛛が降臨す

東のアーリア人の土地から

西のアーリア人たちが去っていく

ワトソンが去ってから何年経つだろうか

アーリア人たちが東と西へ向かってから何千年か

七月四日

岸壁から故郷見つめる赤手蟹

七月十日

蓮華見て回帰する年回顧する

(手植えの蓮が今年も)

船虫と遊ぶ白鳥乱れる季

(夏、よこれた磯に野生の白鳥七羽)

孤絶して睡蓮が咲く船の桶

(脇の店はコロナ禍休業)

七月十八日

始終あり蓮の花弁が散る時節

七月二十日

対岸に夏の煙をたなびかす翁があるか朝の畑で

七月二十四日

パソコンをアップデートし自らも箴言読んで組み立て直す

(魯迅)

七月二十八日

うたた寝が器水養生、気が動く

(佐藤一斎『言志晩録』二九〇)

七月二十九日

蝉去つて庭石無言只貯熱

うつせみがまつにやどるはただいっか
空蝉宿松唯一夏 せきちゆうにしずかなせみのこえをきけ
可聴石中閑蝉声

八月二日

真夏日に町の本屋が自転車で届けた書物敬して開く (『生命とは何か』)

八月四日

青深く大暑の海は空写す

八月七日

栗の木が渴する夏ぞ水を汲め

八月八日

芙蓉樹に沁みこむ潮わたしにも

(路地と通りの側溝に海の水)

八月十一日

ボラ飛んで天に呼びかけ季が移る

八月十三日

幾種もの危険が迫りこの国の社会を試すその耐性を

八月十五日

さまざまなニュースのなかに米国が覇権失う現場映像

世界史で覇権国の興亡はゆっくりした波を描く。それを米国で見れば、第一次世界大戦勝利から一世紀、第二次大戦勝利から四分の三世紀、ヴェトナム撤兵から半世紀、そして今年、湾岸戦争・イラク戦争に連続するアフガン戦争からの撤兵。それなのにあるいはだから、新興中国と対決しようとしている。従属国はどうするのだろうか、歴史は動いているのに。

八月十九日

我が海は芥浮かべて澄むを待つ秋氣しらず天地を満たす

八月二十日

体制の瓦解が何をもたらすか今カブールが歴史再現

(過去に幾度?)

八月二十三日

一列にカモメが並ぶ三十羽秋雨前線列島に沿う

(苦難のなか政局)

八月二十五日

連網で孫に物理を伝授する電腦頼るコミュニケーション

(白板)

八月三十日

夜露降り静まる海を鴻渡る

大鳥が此岸彼岸の上を飛び内なる海を天へとつなぐ
蝶よ羽化して大鳥になれ

八月尽日

はぐれ鶉が今日も身過ぎす浦の朝
「芋の蔓は要らんかね」、「うちも植えちよる」 挨拶返す

大混乱を残したまま米軍撤兵。混乱はそこだけにあるのではない。

九月二日

香氣満つ五花咲き競う無月の夜

九月三日 悲歌

秋雨が政局露呈瓢箪の駒に任せて国は傾く

九月五日

対岸のヨットの白帆我れ照らす 「汝そもいかなる者か」 公案掲げ

久しぶりに小説を読んだ。インゲボルク・バッハマンの『三十歳』が
その非凡な文章で、海浜で修養を決め込んでいる老齡の者を揺さぶる。

九月七日

秋を引く浚渫船とタグボート

九月九日

身に余る小説を読み惑乱しハンドル切つて道を誤る

白萩の背後を白い虎よぎる

九月十三日 土地の名は豊田、瑞穂は稗と稲

九月十四日 雨含む紅白の萩に拝礼す
(手術後一年の検診を終えて帰宅)

九月十七日 湾内に台風を避け大き船甲板低い外国の船

九月十九日 澄む空へ法師が唱和山の墓地

九月二十一日 梔子の香りを帯びる透翅蛾羽化するときぞ今日は名月
クチナシ スカンパガ

九月二十二日 刈り残せ荒れ畑だけど彼岸花

十月二日 朝の陽に虫の音聞かず鼻腔炎

十月三日 陽に浴し夕テ抜くシテが今日を得る

十月六日 熱い秋暮れて蚊を打ち鯛ほぐす

十月十一日

軀臥す座敷の軸に月と萩

十月十三日

白骨と煙から成る人の身を味わう道に未だ拙し

(骨を拾う)

十月十四日

重陽感慨

白鳥の一羽が轆かれ果てた秋

万法共に生流転

半月を見上げて暮れる山と海

諸法生成時遷る中

十月十七日

お茶旨し深まる秋の風の音

十月十九日

時を得て柵と咲く姫林檎

(友と『正法眼蔵』を読む)

十月二十二日

時雨止み朝日が照らす海渡り列車の汽笛この身に響く

陽はツワに狐嫁入る舟に雨

十月二十三日

老騎士は衰弱しても背を伸ばしなお尋ね往く未知の世界へ

十月二十四日

仙境の汽水でハゼを釣る呂尚

(参院補欠選挙投票所そば)

十月二十六日

雁招く空澄み渡り水海月みすくらげ

紙垂そよぎツワが輝く荒神社 世は変り果て浦島太郎

小社で形だけ残っている集落の収穫祭。昔は家ごとに客を招いた。

十月二十八日

駅ピアノで初老の人の弾く曲は「秋の夕日に……」耳傾ける

十月二十九日

曇り無き天衝く塔のごとく立て

十月尽日

過去形で二人の元と同僚の訃報に接し我が身を思う

十一月一日

残り柿と余命一年受納する

十一月七日 冬立って冴える明星三日月

地に在ればなお肩の凝ることが待つ それも生きがい身心ほぐせ

あらゆる事象は、時々刻々に生成されながら、かつ初めての姿で出現する。これが「現成公案」という問いである。

十一月九日 寒氣積む浚渫船から人の声

十一月十日 鵜の衆が冬を乗り切る協議中

十一月十一日 明けの日は時雨を晴らすよい目覚め

——あなたは、今日の世界に哲学の居場所はあると思いますか？

もちろん、ただし、科学的知識と科学的成果の現状に基づいているのなら。……哲学者たちは自分たちを科学から隔離しておくことはできません。科学は私たちの人生観や宇宙観を広げてくれただけではありません。知性というものがどうはたらくか、その法則にも革命的な変化をもたらしました。クロード・レヴィ＝ストロース

十一月十二日 東京へ続く公孫樹が飾る道都市のるつぽへ往く隠遁者 (病後初旅)

十一月十三日 雪冠る富士見て朝餉森の中 (快晴、八王子大学セミナーハウス)

十一月十四日 古代史をいかに解釈するのかを研いだ論理で説明終える

十一月十五日 高尾嶺のもみじ索車で見て降りるあの仁和寺の僧のごとくに

一枚の高尾の紅葉ふところに

富士望む巨大な都市をあとにする (また来ることがあるだろうか)

田園に至福の小春暮れず在れ

十一月十七日 カッターが海月見上げ權挙げる (今夕の權は十本)

十一月十九日 大鳥が空に幾重も輪を描く天と地と海平和であれと

古伊万里の美に引き込まれただ止観

(県立萩美術館)

仙化して大地とともに月を食う

(東の山の端に三日月! 地日月の演出)

ほんのりと変化し月が指輪する

円満に復した月が渡り行く天と海とに慈愛が満ちる

十一月二十三日

突堤に虹の立つ朝 W A L K I N G

フェイジョアが実るうれしさ手に包む

十一月二十六日

この国の政治の劣化かみしめる
ドイツでは、核兵器禁止条約に
オプザーバーでも参加するのに
敗戦国民の意識にこれほどの差

十一月二十八日

おはようと声をかければ岸壁に立つ白鷺が空へと帰る

(接近約3m)

十二月一日

木枯らしが嘯く日には果樹植える

(大実の桜桃)

十二月三日

机の上を這って来る蜘蛛を
ふうーと吹いて遠ざけたら
机の端からすうーと降りて
自ら吐いた糸を吸いながら
苦もなくまた上がって来た

十二月四日

寒風で翳る海見る秋桜

(背戸に一茎)

八十年目の開戦の日を前にNHK「映像の世紀」が戦争を映し出す
テニアン島は、第一次世界大戦のとき
日本がドイツから奪った島 (当然古くから先住の人々がいた)
第二次世界大戦ではアメリカ軍が攻め落とす
日本を爆撃する航空機の滑走路をつくるため
生き残った日本人のなかに二千名もの子供がいた
日本語通訳だった一人の兵士が学校が必要だと気がついて
アメリカの兵士たちがテニアン・スクールを建てた

十二月九日

航空兵は日本を爆撃して帰ると日本の子供たちと語る、ああ
八月六日すぐ近くから飛び立ったB29が積んでいたのは原爆
これらすべてのことを映像が再現する
戦場につながっていた「銃後」を映す今日の番組は
お隣のサイパン島の崖から飛び降りた女性の姿を見せないが
残酷で悲惨で愚かな……戦争の実態を示して
人間の悲しさをつきつける
（敗戦から七十六歳）

大掃除扁額出だす大手柄

十二月十日

亡き父がいつ求めたか扁額の由緒を思い窓ガラス拭く

三十三回忌を前に窓ガラスを磨く。快晴の陽光がかすかな汚れも照射。

十二月十三日

海のもの陸の恵みにお神酒添へ

榊を供へ神主が古きことばで祝詞を唱ふ

柏手を打って小太鼓打つからに

磯の祠を清める雨よ、さてもそろそろ止みたまへ

反歌 大歳の神の社で年の瀬の形ばかりの祭礼をする

大歳神はもともと豊年の神で実りの神ともされる。スサノオの子で穀物神の宇賀神と兄弟とされ、出雲系の神と考えられる。長門の国には須佐という地名もあり、土井が浜や長門二見夫婦岩を含むたいへん広い地域の大字名が「宇賀」だし、大歳神社も多い。大歳神は『古事記』で海上から現われたとするからだろう、この地方では陸の豊穰を連想させる大歳神を漁師が祀る。しかし、ほとんど惰性的に行なわれる行事に出席する漁師がもういない。昔の共同体を引き継ぐ集落で世話人の一人になる番が回ってきて、無神論者もこういう行事を見学することになる。テレビが神社の煤払いを放映するところを見ると、十三日ころ歳の瀬の準備を始める慣習だったのだろう。

十二月十七日 時化ついて空腹満たす鵜の暮らし

十二月二十日 大掃除あらかたの物みな捨てる思考の軌跡示す資料も

祖父母の代からの食器類など。物理の研究資料もまだ残っていた。

十二月二十三日 日時計の影長き日も夕焼けて (老けた慶応ボーイに暮れの挨拶)

十二月二十五日 コスモスを一輪足して年の瀬の華やぐ書齋、現成公案

コスモスでピエロが二人シーソーに乗って上下しやがて静止す

十二月二十六日 枯れ蓮を護るか鉢に薄氷

十二月三十日 し残しに孫と塾頭おおわらわ

(ささえが到来)

十二月三十一日 鯉跳ねておおつごもりの祝言

不可思議な命を授けて巡る年

二〇二二年 正月
白江庵 謹製



I・バツハマン『三十歳』から

.....
きみが解き明かせるのは方程式だけ、それが世界でもある世界も一つの方程式だ。それは自らを解き、そうすると……しかし、きみのなかにあるものと同等のものはない、きみのなかにある世界と同等のものはない、

もしきみがそれを手放すことができ、善と悪についてのいつもながらの不安感から抜け出して、古い問いからなるどろどろの塊をそれ以上かき回さないならば、もしきみが進歩した世界のなかに入っていく勇氣を持つなら……もしきみが古い人間をあきらめて、新しい人間を取り込むのなら、そうしたら

.....
新しい状況が作られたら

ついに「ついに」というときが来たら……そうしたら……

